

# ユートピア文学としての فرانケ SF

志 田 慎

## 0. はじめに

ユートピア<sup>1)</sup>文学は空想上の未知の文明を描く。多くは、それによって現在の文明や社会を批判する。未来の社会や、宇宙の異なる文明を描くSFもユートピア文学であるといえる。<sup>2)</sup>フランケもよくユートピアを描くSF作家の一人である。フランケの描くユートピアの社会を管理している者はだれかという点に着目すると、人間、AI、トランスヒューマンの3種に分類できる。以下に実例として、種類別にいくつか作品を挙げる。

## 1. 人間が支配する社会

### 1.1. 『思考の網』(Das Gedankennetz<sup>3)</sup>)

超福祉国家、ハイパー監視社会。犯罪または社会への不適合は病気であり、そうした病気の兆候はNetz(網)またはErlebnisprüfung(体験テスト)と呼ばれる心理テストで発見されるが、テスト中の被験者にその自覚はなく、テストによる疑似体験を現実と思い込む。不適合と判断された者は治療(脳手術)され、社会へ再統合される。結果、犯罪のない理想の社会ができあがる。

### 1.2. 「アインシュタインの遺産」(Einsteins Erben<sup>4)</sup>)

いちおうは人間が支配しているが、すべては(機械のメンテナンスを含めて)オートメーション化されている。機械や科学に関心を持つ人間は異常者とみなされ、医師の判断により再適合化手術を受けるが、手術はマシンで自動的に行われ、医者ですら詳しい仕組みは知らない。

### 1.3. 「調整官」(Die Koordinatorin<sup>5)</sup>)

女だけの社会。男は駆逐済み。人間を専らクローン技術で生産。  
1970 年前後に興隆したジェンダー SF<sup>6)</sup> にも分類できる。

### 1.4. 「パパ・ジョー」(Papa Joe<sup>7)</sup>)

入信するとパパ・ジョーや天使の声が聞こえるようになり、あらゆる疑問に答えてもらえるので、何も迷うことがなくなり、みんな幸せになる。実は洗礼時に注射されたナノマシンを通じてラジオコントロール。

### 1.5. 「紀元 3000 年のパラダイス」(Paradies 3000<sup>8)</sup>)

人口爆発に対応。人はみな 30 歳で冷凍される<sup>9)</sup>。16 歳以上は治療なし、ケガすれば冷凍。

## 2. AI が支配する社会

### 2.1. 『蘭の鳥かご』(Der Orchideenkäfig<sup>10)</sup>)

完全オートメーション社会。AI がすべてを管理し、人間を保護。人間は何もしない、何もしなくてよい、何もできない。労働だけでなく、思考も AI が代行。地下のシェルターにズラリと並べられた蘭の鳥かごのようなものが、実は進化(または退化)した人間。あらゆる器官が失われ、植物のような姿をしており、動く必要も意志も能力もなく、ロボットの世話を受けている。

異星からの訪問者の疑問に、ロボットが応答する。

Der Roboter fing zu sprechen an:

»Die Menschen haben die ersten automatischen Einrichtungen gebaut, um sich von ihnen bedienen zu lassen. Später haben sie Automaten konstruiert, die sich selbst weiterentwickeln konnten, das ist bis zum heutigen Tag geschehen. Aber noch immer ist unsere erste Pflicht, die Menschen zu bedienen und zu beschützen. Alles, was wir für sie und an uns getan haben, hatte nur den Zweck, die Menschen immer besser und vollständiger zu bedienen und zu beschützen.

Zuerst haben wir die Arbeit und das Denken übernommen.

(S. 167)

ロボットは話し始めた。

「人間は自分たちの世話をさせるために、最初の自動装置を作りました。その後、人間は、自己改良できる自動機械を構築しました。これが今日までに起きたことです。しかしあいかわらず私たちの第1の義務は、人間を世話し、保護することです。私たちが人間のために、また自分たちのためにしたことはすべて、人間をよりよく、より完全に世話し、保護することだけを目的としてきました。

はじめに私たちは労働と思考を引き受けました。

»{...} Da beschlossen wir, die Menschen – selbstverständlich mit ihrem Einverständnis – in die Kellerräume der Zentrale in Sicherheit zu bringen. Unsere Technik war so hoch entwickelt, daß wir ihnen jeden Wunsch durch Gehirnzellenreizung erfüllen konnten. Ich glaube, wir haben ihnen dadurch den Weg zum vollkommenen Glück, zum vollkommenen Frieden und zur vollkommenen Sicherheit gebahnt.«

(S. 168)

「その時私たちは、人間を、もちろん彼らの同意に基づいて、センターの安全な地下空間に移すことを決定しました。私たちの技術は、人間のあらゆる望みを脳細胞の刺激によって叶えることができるほど、高度に発達していました。私は、私たちがそれによって人間に完全な幸福、完全な平安、完全な安全に至るための道を開いたと信じます。」

»Wo ist das Gehirn?«

Der Strahl kennzeichnete eine verknäuelte, vielfach verdickte Masse, die von einer Mulde in der oberen Hälfte der Gebilde herabwucherte. Von allen Seiten liefen feine Fäden wie Spinnewebe darauf zu und ins Innere hinein.

»Was sind das für Fäden?«

»Mit ihnen erzeugen wir angenehme Vorstellungen. Ruhe, Zufriedenheit, Glück – und anderes, wofür ihr keine Worte habt.«

»Denken sie nicht?«

»Wozu sollten sie denken? Glück kommt nur durch das Gefühl. Alles andere stört.«

(S. 171)

「脳はどこだ？」

光線によって目印がつけられたのは、形成物の上半分にあるくほみから垂れ下がり、幾重にも重なって繁り、球状に膨れ上がった塊だった。その上に、全方面から蜘蛛の巣ほどに細い糸が通じており、内部へと入り込んでいた。

「この糸はなんだ？」

「この糸で私たちは、心地よいイメージを発生させるのです。安らぎ、満足、幸福や、あなたたちの言語では表せないその他のものです。」

「彼らは考えはしないのか？」

「何のために考えるのですか？ 幸福は感情からのみ来ます。他のすべてのものは邪魔です。」

»Können sie sich mit uns verständigen?«

»Sie brauchen sich nicht zu verständigen – mit niemand.«

Die beiden fragten nicht mehr. Mit schwimmenden Augen starrten sie auf die blütenhaften, schlaffen Organismen in ihren Schutzhüllen aus Metall, Glas und Kunststoff, die auf ihre Weise ihr Ziel erreicht hatten: das Paradies, das Nirwana, das Alles und das Nichts [...]

»Das also ist es«, murmelte Al, »die Wunschlosigkeit. Der Frieden. Die Unschuld. [...]«

(S. 171)

「彼らはわれわれと意思疎通できるか？」

「彼らはだれとも意思疎通する必要がありません」

二人はもう質問することがなかった。泳ぐような目で彼らは、金属やガラスやプラスチックでできた保護被覆に収まる、花のような、たるんだ器官を見つめた。それらは、自分たちの流儀で自分たちの目標に

達成していた。楽園、涅槃、全にして無の境地だ。

「これはつまり」アルが呟いた。「望むことのない状態だ。平安だ。天真爛漫だ」

フランケにおいては、多くの通俗的なSF作品とは異なり、人間を超えたAIが人間を抑圧したり、滅ぼそうとしたりする<sup>11)</sup>ことはない。むしろ、人間は自ら、面倒事をすべてAIに委ねて行き、その一環として思考までも委ねてしまうが、この過程のすべてはあくまで人間の自由意志に基づく。

## 2.2. 「2000年後」(2000 Jahre später<sup>12)</sup>)

VRシステムが人間のあらゆる願望を叶える。人間はだれも、何も活動しない。何もかも平和を乱すことができない。

## 3. トランスヒューマンが支配する社会

### 3.1. 「庇護」(Asyl<sup>13)</sup>)

能動的な側の住民と、受動的な側の住民のどちらに加わるか、14歳で選択する。受動的住民は元来の人間の姿のまま、踊ったりゲームをしたり、遊んで暮らす。みな白痴のように見える。機械に世話されて生きる。能動的住民は身体を捨てて機械と融合し、集合体を形成。外界とは無線操縦の機械を通して関わる。受動的住民の世話を含め、さまざまな問題に取り組む。

Es liegt nun an euch, was ihr vorziehen wollt – ein sorgenfreies, glückliches Leben in ewiger Jugend, oder eine Existenz mit einer unabmeßbaren Freiheit des Handelns, freilich der Verantwortung unterworfen, die die Möglichkeit zur Entscheidung mit sich bringt.

(S. 492)

どちらを選ぶかは、あなたたち次第です。いつまでも若いままの、不安もなく幸福な生活か、あるいは計り知れない行動の自由を持つ存在か。むろん選択可能であるからには、責任が伴います。

### 3.2. 「世界の中枢」(Zentrale der Welt<sup>14)</sup>)

人間はデジタル化され、複製可能。個別の人格は保持されている。

### 3.3. 「ゼロ地帯」(Zone Null<sup>15)</sup>)

本人の望む間、生身に留まる。いつでも肉体を離れて集合的知性へ合流できる。

## 4. まとめ

以上の3種類の「無い場所」を比べてみると、最も「酷い場所」であるのは、人間が支配する社会だといえる。人間を最も抑圧するのは人間ということだ。一方、思考する機械= AIに必要なすべてを任せ、人間はもはや不要となった思考を放棄し、安楽に耽るのみの社会では、人間は必然的に退化する。しかし人間が科学的思考を放棄せず、知的探求を続けるならば、人間を超えて(自己改良により)進化するAIを理解しようとするだろうから、そのために人間は自らの限界を超えて知的能力向上(思考速度を上げ、記憶容量を増やす)をはかる必要から、AIと融合せざるを得ないだろう。人間が人間を超えること、すなわちトランスヒューマンの誕生は必然の過程だろう。

### 注

- 1) ユートピア Utopia(羅・英)Utopie(独)、語源はギリシャ語 οὐ(無い), τόπος(場所)。Utopiaは英語での発音の類似から Eutopia (εὖ-, 良い+場所)と同一視されることがあるが、これは『プロトホ辞典』の「ユートピア」(Utopie)の項によれば原作者トマス・モア(Thomas Morus/More)の故意に負うもので、このために文法的により適切な Atopia でなく Utopia という名称が採用されたという。

Der Begriff bezeichnet einen Ort, den es nicht gibt, einen Nicht-Ort, ein Nirgendwo. Geprägt wurde er von Thomas Morus in seinem 1516 erschienenen Roman *Libellus vere aureus nec minus salutaris quam festivus de optimo rei publicae statu deque nova Insula* („Ein wahrhaft kostbares und ebenso bekömmliches wie kurzweiliges Buch über die beste Staatsverfassung und die neue Insel Utopia“).

Morus bildet aus den altgriechischen Wörtern für nicht (οὐ [*u*]) und Ort (τόπος [*tópos*]) den Kunstbegriff *Utopia*. Ihm hat offenbar zunächst der lateinische Titel „Nusquama“ (Nirgendland, von lat. *nusquam*, ‚nirgends‘) vorgeschwebt. Diesen Namen verwenden Morus und Erasmus von Rotterdam in ihrer Korrespondenz zur Drucklegung der *Utopia*. Erst im November 1516 scheint sich der griechische Neologismus durchgesetzt zu haben. Vermutlich auch wegen der lautlichen Gleichheit von „utopia“ und „eutopia“ im Englischen. „Eutopia ist der Name, mit dem ich rechtens zu nennen bin“, heißt es in einem Lobgedicht, das dem Text der *Utopia* in der Erstausgabe vorangestellt ist („Wherefore not Utopie, but rather rightely / My name is Eutopie - place of felicitie“). Der französische Humanist Guillaume Budé schlägt in einem Brief, der seit der französischen Ausgabe von 1517 in die *Utopia* aufgenommen wurde, einen der Begriffsbildung *Utopia* vergleichbaren griechischen Neologismus vor: *Udepotia*, also Niemalsland (von griechisch *udepote*, ‚niemals‘). Dieser Begriff wäre auch grammatisch korrekt gewesen. Denn im Griechischen wird „u“ zur Verneinung eines Satzes verwendet, einzelne Wörter aber mit dem vorgesetzten „a“: Richtig wäre also die Bezeichnung *Atopia* gewesen (vgl. Kytzler 1985, 197). Aber dann wäre der Anklang an *Eutopia* verloren gegangen. Der korrekte Neologismus *Udepotia* dagegen setzt einen Zeitbezug. Für Morus scheint aber der räumliche Aspekt wichtiger gewesen zu sein, um die Nichtwirklichkeit seines Modells zu charakterisieren. Die Rezeption durch das zunächst angesprochene Lesepublikum, die Elite der europäischen Humanisten, bestätigt und verstärkt die Bedeutungselemente, die Morus seiner Begriffsbildung beigibt: Nichtwirklichkeit, Idealstaat, Modellcharakter, Realitätskritik (vgl. Funke 1991, 12).

(Beat Dietschy, Doris Zeilinger, Rainer Zimmermann (Hrsg.) : Bloch-Wörterbuch: Leitbegriffe der Philosophie Ernst Blochs. Berlin / Boston, 2012. S. 634)

ユートピアから派生したディストピア (δυσ-, ひどい+場所) *Dystopia* (英), *Dystopie* (独) も、無い場所という意味においては *Utopia* の一種であるから、本稿では良い場所も悪い場所も区別せずユートピアと呼ぶ。

- 2) さらに、未来ものや宇宙ものに比べて触れられることが少ない印象があるが、SFのサブジャンルの一つである歴史改変小説も、あり得た過去や現在を描くものであり、ユートピア文学の変種であると言える。第2次大戦で大日本帝国とナチス・ドイツが勝利した後の世界を描くフィリップ・K・ディック『高い城の男』(浅倉久志 訳, ハヤカワ文庫, 1984. [Philip K. Dick: The Man in the High Castle. 1962.])では、アメリカの東側をドイツが、西側を日本が支配している。同じ設定に沿った最近の作品として、ピーター・トライアス『ユナイテッド・ステイツ・オブ・ジャパン』(中原尚哉 訳, 早川書房, 2016. [Peter Tieryas: United States of Japan. 2016.])では治安維持法に基づいて特高警察が活躍するディストピアが描かれる。
- 3) Herbert W. Franke: Das Gedankennetz. München 1961.  
この長編については拙稿: ヘルベルト・フランケのサイバネティック SF『思考の網』におけるテクノロジー批判について(日本大学生物資源科学部『人間科学研究』第4号, 2007.)を参照されたい。
- 4) Herbert W. Franke: Einsteins Erben. In: HWF: Einsteins Erben. 1972.  
この作品を含む短編集のいくつかの作品については、拙稿: 技術的特異点以後の人間の二通りの生き方 — フランケのポストヒューマン SF『アインシュタインの遺産』— (『リユンコイス』44号, 2011.)を参照されたい。
- 5) Herbert W. Franke: Die Koordinatorin. In: HWF: Einsteins Erben. 1972.
- 6) 他の例としては、すべての人々の性別が周期的に変わる世界を描いたアーシュラ・K・ル・グイン『闇の左手』(小尾美佐 訳, ハヤカワ文庫 SF, 早川書房, 1977. [Ursula K. Le Guin: The Left Hand of Darkness. 1969])や、ドイツのものでは、性別を変更する薬品を女性科学者が自ら実験する Christa Wolf: Selbstversuch. 1974. などがある。
- 7) Herbert W. Franke: Papa Joe. In: HWF: Zarathustra kehrt zurück. 1977.
- 8) Herbert W. Franke: Paradies 3000. In: HWF: Paradies 3000. 1981.
- 9) アルコー延命財団 (Life Extension Foundation) によれば人体の冷凍技術の概念は1964年、ロバート・エッティンガー (Robert Ettinger) によって提唱され、財団は1976年7月16日、最初のヒト凍結保存を行った。  
<https://www.alcor.org/AboutAlcor/index.html>  
ただしこの処置は死後に行われる。人口爆発の対策として生者が冷凍保存される社会を描いた先行のSF作品としては、フィリップ・K・ディック



『空間亀裂』（佐藤龍雄訳，創元 SF 文庫，2013. [Philip K. Dick: The Crack in Space. 1966.]）がある。

ちなみにアルコー財団の CEO はマックス・モア（Max More）。

- 10) Herbert W. Franke: Der Orchideenkäfig. München 1961.

以下，この作品から引用する原文には頁数のみ示し，続けて拙訳を付す。同作家の他の作品についても同様。

作品タイトルは，鳥かごにあしらった蘭の花のことと思われる。Web サイト『植物生活』に，「鳥かごに色鮮やかな蘭」の題のページがあり，写真が掲載されている。

<https://shokubutsuseikatsu.jp/article/news/p/2867/>

- 11) 代表例を一つ挙げるならば映画『ターミネーター』シリーズ。第1作はジェームズ・キャメロン（監督）『ターミネーター』，米国，1984. [James Cameron (Regie) : The Terminator. USA, 1984.]

- 12) Herbert W. Franke: 2000 Jahre später. In: HWF: Paradies 3000. 1981.

- 13) Herbert W. Franke: Asyl. In: HWF: Einsteins Erben. 1972.

- 14) Herbert W. Franke: Zentrale der Welt. In: HWF: Einsteins Erben. 1972.

完全にデジタル・データ化され，コンピューター内に暮らす人間たちを描いた SF としてはグレッグ・イーガン『順列都市』（山岸真訳，ハヤカワ文庫，上・下巻，1999. [Greg Egan: Permutation City. 1994.]）がある。フランケは先駆的といえる。

- 15) Herbert W. Franke: Zone Null. 1972.

この長編については拙稿：『超越する道具としてのコンピューター —ヘルベルト・W・フランケの SF『ゼロ地帯』におけるトランスヒューマニズムについて—（『リユンコイス』47号，2014.）を参照されたい。